

台湾の日本語学習者の作文に見られる日本語の 一人称代名詞の使用について

曾 儀婷

広島大学大学院 国際協力研究科 大学院生
広島県東広島市鏡山1丁目5番1号
広島大学大学院 国際協力研究科

1. はじめに

日本語の人称代名詞は、必要以上に使用するなど、その不適切な使用は、最低でも日本語母語話者に違和感を抱かせる原因となるものである⁽¹⁾。ゆえに日本語学習者にとっては、人称代名詞の正確な使用は習得上の重要な課題になっている。にもかかわらず、日本語における人称代名詞の使用に関する研究は管見の限りまだ少ない。

そもそも人称代名詞の使用過多はなぜ起きるのだろうか。

寺内・白井(2001)は、以下に示すような教科書の文を例に、そのような文型を学ばせること自体が原因であるという。

T: 私は、 です。(何度か繰り返す)
次にSをさしながら、「あなたは？」と聞く
S: 私は です。

他方村上(1996)は、教科書の影響以外にも、実は学習者の母語が日本語の習得に干渉しており、その事も原因の一つであるという。

例えば中国語を母語とした者が日本語を学習する場合、中国語と日本語の人称代名詞ではその種類に大分差があり、また中国語では主語の省略が日本語と比較して少ないという理由から(ここでは人称代名詞が主語の場合を考える)、彼らは日本語でも中国語と同様に人称代名詞を多用してしまう。すなわち、学習者は自分の母国語の習慣を、

そのまま目標言語に持ち込んでしまうため、最終的にそれが誤用の原因になると思われる。

しかし、こういった豊富な研究成果がありながら、台湾の日本語学習者にとって、必ずしも人称代名詞の使用過多の問題が解決されているわけではない。それは単純に台湾の日本語学習者を対象にした研究が少ないというだけでなく、もうひとつ既存の研究のあり方、すなわち人称代名詞の扱い自体にも問題があったといえよう。

というのも、従来人称代名詞の使用に関する研究は、対照言語学や誤用分析など、いずれも親族名称・職業名・肩書きなどの呼称詞と同じカテゴリーとして扱われたものが多かった。それは人称代名詞の使用頻度が日本語ではそれほど高くないと思われるからである。しかし、最初に述べたように、学習者が人称代名詞の不適切な使用は日本語母語話者に違和感を抱かせる恐れがあり、日本語を習得する過程では会話をスムーズに運ばせるために、人称代名詞の使用およびその指導を見逃してはいけない課題であると思う。そこで本稿では、人称代名詞を単独の独立した一つのカテゴリーとして注目し、その分析を行うことにする。

そこで、本稿では、中国語を母語とする台湾日本語学習者が日本語を習得する過程における人称代名詞の使用について、その類型化をはかるとともに、機能的な分析⁽²⁾でもって、彼らが習得過程における人称代名詞の使用上の変化およびそれらの機能的な使用を明らかにしようとするものである。ここでは、台湾日本語学習者が少しでも人

称代名詞を正しく使用する際に助けとなる研究になることを期待したい。

2. 先行研究

類型化をはかるために、これまでの人称代名詞に関する先行研究を整理したうえで、人称代名詞の機能を定義することを試みる。一人称代名詞に関する先行研究を見ると、モダリティと人称代名詞・授受表現と人称代名詞・敬語と人称代名詞を関連付けた研究がある。

2.1 モダリティ⁽³⁾と人称代名詞

モダリティと人称の研究に関しては、仁田(1991)が詳しい。モダリティを働かけ表出述べ立て問いかけの四タイプに分ける。その中には、表出を表す意思・希望の文は、それらが発話・伝達のモダリティで使われている限り、主体を表す名詞句の人称代名詞が一人称代名詞に限られる人称制限を有していると言われている(仁田, 1990: 30)。

- (1){ 僕/*君/*彼 } は今年こそは頑張ろう。
 (2){ 私/*あなた/*お父さん } は酒が飲みたい。[仁田(1991: 30)]

(1)(2)が示すように、意志や希望の文は、二人称代名詞や三人称代名詞の主体を表す名詞を取りえない。つまり、意志や希望は、表出の発話・伝達のモダリティで使われている限り、主体を表す名詞句は一人称代名詞に限られるといった人称制限を示すのである。

しかし、(3)(4)のような文は日本語でしばしば見られる。

- (3) 僕は研究会に行こう。
 (4) 私が行こう。

日本語では、ある文脈で話し手が自分自身のことを自ら語る時、主語は通常助詞「八」で取り立てられ主題化するが、主題化された主語はほとんどの場合省略され、文中に現れない。助詞「八」は、主題や対比を表す助詞とする。但し、その基

本的機能は主題を表すものとし、対比は主題の「八」が内在的に持っている特性と考える(柴谷, 1990)。さらに、対比の意味合いがどの程度強く現れるのかは、文の構造やコンテキストによって決まると考える(野田, 1996)。しかし、意志や希望を表す用法が日本語では話し手自身(ここでは一人称代名詞のことを指す)ではないと成立できないという制限から見れば、主題が省略できても省略しない場合に、わざわざ取り上げられたその主題にはなんらかの意味が潜んでいると考えるのが可能である。つまり(3)のような意志の文は、動作主体を表す名詞句が「八」で表示された場合、その「八」は、通例、単なる題目を表すものではなく、外の人間との対照において、外の人間でない僕自身が動作主体として取り立てられている。(4)のように、動作主体が「ガ」で表示された場合、その「ガ」は、通例、中立的な叙述を示すものではなく、外の人間ではなく私が、といった排他特立を表している。そこで、意志や希望などの文中にわざと一人称代名詞を取り上げる場合は、外の人間と対照する意味があると考えられる。

同じ日本語の意志表現では、「～するつもり」や「～と思う」などもこのカテゴリーに属している。動詞「～と思う」とその主語の省略について、李萍(1994)はテキストの分析を通して、日本語のムード(モダリティ)主語省略文と一人称代名詞および両者の関係を論じ、平叙文に自分の意志を表す場合、わざわざ一人称代名詞を取り上げる必要はないとした。同じ「～と思う」の研究である甲斐澤(1992)は、テレビの対談番組の内容を文字化したものを分析し、「～と思う」と一人称代名詞の現れ方について、平叙文かつ主語が一人称代名詞の場合は、主語がないのが本来の姿であり、主語があるときは主に強調の意味を表すとしている。

一方、意志と繋がりがあり、述べ立ての内容が感情や感覚といった内的状態を表したものがある。それは日本語の形容詞の人称区別機能が、はっきり表れる感情表現である。

例えば、(5)のように、一人称代名詞「私」という主語が現れないのが一般的で、より自然な形なのである。

- (5) ?私はうれしい。
 (6) *あなたはうれしい。
 (7) *妹はうれしい。

(6)(7)のような例では、「うれしい」という感情を表す形容詞は、自分について言うものであって、他の人については、別の表現が必要なものである。

- (8) 妹はうれしそうな顔をしている。
 (9) 妹は喜んでいる。
 (10) あの子は母を恋しがっている。

例(8)～(10)のような言い方は一般的に正しいである。つまり、「うれしい」「悲しい」などは、本来、話者の心情に関するもので、これに対応する第三者の心情表現は、通常存在しない。したがって第三者には「形容詞+がる」のような内的状態の外在化する別の系統のことは使わなければならない。

2.2 授受表現と人称代名詞

日本語の授受動詞における「人称の制約」および「話者の視点」について、寺村(1982: 133-134)は次のように述べている。

ヤル, アゲル, サシアゲルは「与エル」類の動詞と、そしてモラウ, イタダクは「受ケル」類の動詞と共通の意味的・統語的特徴をもち、一応それぞれの類のメンバーと考えてよいが、その仕手と相手についてと特別の制約がある点で、それぞれの特異なものということができる。その制約というのは、与える人がだれで、受けとる人が誰ということについての特別の条件である。しかも、いわば人称についての制約が、西洋語におけるような絶対的な性格のものでなく、相対的なものである点に注意しなければならない。

また、益岡・田窪(1992: 86-87)は、以下のよう述べている。

「一人称(私) > 二人称(あなた) > 三人称(それ以外)」という人称の序列に従って言うと、

原則として「あげる」と「もらう」では、主体の方が相手より人称の序列が上であり、「くれる」では相手の方が主体より人称の序列が上である。ただし「あげる」と「もらう」については、主体と相手がともに三人称であってもよい。

以上の主張はいずれも人称代名詞の使用が授受表現の間に使用制限があるというのである。

2.3 敬語と人称代名詞

日本語は、敬語に関する語彙や形態素を比較的豊富に持っている言語であるが、その運用にあたって、人称との関連も見逃せない。そもそも日本語における敬語は相手に対する敬意・思いやり・丁寧に対する考慮を払うときに使用されることばであり、それによって相手との関係を位置付け、誰のことを指しているのか明白にさせる。

敬語と人称代名詞の研究について、金水(1988)や三輪(2000)などがある。三輪(2000)は日本語では適当な敬語表現で人称代名詞を回避できると指摘した。相手のことを言及するときに尊敬語を使い、自分のことを言及するときに謙譲語を使うことによって、人称代名詞の使用を避けることができる。例えば、「私が参ります」、「私にやらせてください」などと言わなくても、「参ります」、「やらせてください」で十分わかる。にもかかわらず、そこになお「私」や「僕」という一人称代名詞を発言すれば、それだけで強調の意味合いを持つことになる。もし、それが一人称の場合ならば、時に強い自己主張や自尊の色合いを帯びる。つまり、「私が参ります」、「私がいく」ということばには、ほかの誰でもなく、私こそが行くのだという強調の意味が含まれるのである。さらに、金水(1988)は、日本語は敬語に関する語彙や形態素を比較的豊富に持っている言語であるが、その運用にあたって、人称との関連を見逃せないという。

日本語では、話し手は身内でない人を聞き手として、身内の人に言及する場合、身内の人物に対して尊敬語化を発動してはいけないという運用上の規則が見られると述べている。例えば

- (11) うちの{父 / *お父さん}がこう{言ってい

ました / 申しておりました}.

(12)(会社の社長秘書が外来の客に対し)

社長はただ今外出 {しております / *なさっています}

また、逆に聞き手の身内の人物に言及する場合は尊敬語化が発動されやすいが、話し手にも聞き手にも同等に疎遠な人物に対しては尊敬語化が発動されることは少ない。いずれも、敬語と人称代名詞の連関を示す現象と言える(金水1988: 111)。

2.4 話題導入と一人称代名詞

既知情報・未知情報と似た意味で使われるものに、言語学では主題・題述という用語がある。新しい情報を導入するのに、主語が助詞「は」とともに文頭にくるのは日本語では主題であることを表す標識である。神崎(1994: 172)は、文文法レベルでの話題と代名詞に関して、「代名詞は話題になっている句(節)の中の同一名詞句と照応可能である」と一般化されていると指摘した。

そして、雨宮・林部(1993)によると、日本語の主語省略文の多くは主題展開文であり、非省略文の多くは主題導入文であったという。

しかし、談話、もしくは文中の主題が変わるときに、指示表現は代名詞からもとの名詞・固有名詞に変更されるという原則を神崎(1994: 198)は指摘した。従って、話題導入をするために使われる人称代名詞は、話題の変更により、ふたたび使用される可能性があると考えられる。

2.5 一人称代名詞の機能

一人称代名詞をたとえ使用しなかったとしても、発話、伝達、モダリティ、意志表現、授受表現、敬語表現、もしくは様々の文末表現などとの関係性を考慮すれば、おのずとその代名詞がいったい誰のことを指しているのか推測することが可能である。だからこそ、そこをあえて使用すると、いくつかの効果がうまれることになる。では人称代名詞が持つ機能とはどのような種類があるのだろうか。これまで日本語の一人称代名詞の使用と不使用に関して、従来の研究成果を整理してきた。本稿は先行研究に基づき、人称代名詞の機能を二

つの側面から考える。

一般的に新しい話題が導入される時、一人称代名詞はそれが誰のことかはっきりさせるために使用されるだろう。そして、平叙文かつ主語が一人称代名詞の場合は、主語が現れないのが本来の姿であるが、主語を強調したい時に一人称代名詞を使用するだろう。またある対象と別の対象とを比較する時にも、よく使用されよう。逆に比較対象が特に存在せずとも、自分を他人と区別する目的で以って使用することもあるといえる。となれば、これらの効果から、一人称代名詞の使用には、「話題導入」、「強調」、「対比」、「明示」の四種類の機能が存在するといえよう。

一方、一つのセンテンスにおいては一人称代名詞が文の成分として機能している。これには主語や目的語などが考えられる。第2節の先行研究において扱われた人称代名詞はほとんど主語である。したがって、文の成分としての人称代名詞と文機能を分類して考える必要があると考えられる。そこで、本稿では主語と主語以外に分けて考えてみる⁽⁴⁾。

3. データと分析方法

日本語の習得歴の違いによって、学習者の人称代名詞の習得過程上の、その使用についてどのような変化があるかを見るため、初級レベル学習者と中級レベル学習者の作文を収集する。さらに、学習者の習得過程における人称代名詞の使用と教科書との一致について、初級レベルの教科書と中級レベルの教科書、それぞれ4冊を材料にする。

そもそも海外で日本語を学ぶ学習者にとっては、教科書が大きな役割を果たしている。日本語母語話者と接触して学習できる機会が少なく、教室における学習がほとんどである。このように日本語教師の指導のもとに、教材等を使用して日本語を学ぶ場合に教科書が学習者の人称代名詞の表現習得に影響を与える可能性が高いと考えられる⁽⁵⁾。そこで、本稿は、教科書に見られた人称代名詞の使用が、学習者の作文中に見られた人称代名詞への使用に影響を与えたかどうかを検証することも目的としている。

表1. 学習者の概要

学習者	人数	学習歴	作文の題目
二年生	161名	約2年	「私の冬休み」、「拓殖大学生の中国語スピーチコンテストを聞いて」、「クレジットカードは必要か不必要かについて」、「ある日のできごと」など
三年生	150名	約3～4年	「今年の冬休み」、「権利と義務」、「お正月に驚いたこと」、「私にとって幸せとは」など

3.1 研究範囲

人称代名詞とは、いわゆる事物、場所、方向を指示する指示代名詞に対し、人を指示する代名詞と、一般的に定義されている。だが人称代名詞に限ってみても様々な語がある。本稿で扱う日本語の人称代名詞には、一人称、二人称、三人称の別がある。一人称では「私」「ぼく」「わたくし」「俺」「わし」などの語が、一人称を指すための言葉として使用されている。なお本稿では一人称のみを扱うことにする。本稿では人称代名詞の出現回数だけではなく、人称代名詞が文中でどんな機能を働かすかということも重視したい。なお人称代名詞の視点移動の用法⁽⁶⁾は省くこととする。人称代名詞の視点移動の用法は、会話中でよく見られるが、文章中ではあまり使用されないからである。

3.2 データ

分析資料は、台湾の私立東呉大学日本語学科に在籍している学習者が書いた作文と、台湾で使用されている教科書8冊である。

台湾の日本語学科の学習者等の概要は表1に示すとおりである。中には700字以上のものもあるが、おおむね作文の字数は600字前後のものがほとんどである。

日本語学習者の作文中の人称代名詞の使用傾向と対照するために、教科書も会話文を除外してテキスト文中(日記、投書など)に現れた人称代名詞を分析する。学習者の書いた作文のテーマは様々であり、それによってスタイルが異なるのは事実である。また、今回に用いた教科書も各課のテーマに様々なジャンルに分けられ、けっして均一的なスタイルとは言えない。しかし、作文は身近なことがらをテーマに、基本文型を基盤として書かれたものであり、今回使用した教科書も学習者に習得させやすいテーマが多いため、スタイル

の不均一性はあまり考慮する必要がないと思われる。

分析に用いた教科書の著者または編者、発行年および教科書のタイトルは以下の示す通りである。括弧内に示すのはそれぞれの教科書の略称である。

初級レベル

- 鷗沢梢(1998)『作文とスピーチのレッスン～初級から中級へ～』(作文とスピーチ)
- 水谷信子(1991)『総合日本語初級から中級へ』(総合日本語)
- C&P 日本語教育・教材研究会(1988)『日本語作文』(日本語作文)
- 頼 錦雀(1997)『台湾で学ぶ初級日本語』(台湾で学ぶ初級)

中級レベル

- 水谷 信子(1998)『現代日本語中級総合講座』(現代日本語中級)
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター(1994)『中級日本語』(中級日本語)
- C&P 日本語教育・教材研究会(1988)『日本語作文』(日本語作文)
- 頼 錦雀(1998)『台湾で学ぶ中級日本語』(台湾で学ぶ中級)

3.3 分析方法

分析手続きとしては、まず、作文中と教科書で使用される人称代名詞を抽出する。次は、抽出した人称代名詞の、出現回数を統計し、機能別に分類する。このとき先行研究の2.5に述べたように、機能を「文機能」と「文法機能」の二つに分類する。さらに、レベル別・機能別で見られる人称代名詞の使用差を検討する。最後に、学習者の作文に現れる人称代名詞と教科書に見られる人称代名詞を比較する。

表2. 作文に見られる人称代名詞の語別出現回数

	編 数	私	俺	僕	私たち	私 達	僕 ら	僕 達	なし ^{*1}	総出現数	割合 (%)
二年生	161	444	1	18	61	21	2	0	8	547	30
三年生	150	295	1	18	46	31	0	3	39	394	38

*1「なし」とは作文中に一人称代名詞が一回も使用されていないことを表す

分析は、先行研究を土台に分類した日本語の人称代名詞の機能に基づくこととし、人称代名詞の使用機能に注目するものであるため、作文中に見られた他の文法的な誤用には触れない。便宜上二年生の日本語学習者を「二年生」とし、三年生の日本語学習者を「三年生」とする。初級レベルの教科書を「初級」とし、中級レベルの教科書を「中級」とする。

4. データの分析と結果

4.1 使用頻度

4.1.1 作文中に見られる人称代名詞

まず分析資料で使用されている人称代名詞の表現について、一人称代名詞は「私・僕・俺」、「私たち・僕たち・僕ら」がある(表2参照)。161編の二年生の作文中の人称代名詞の総出現回数は547回に対し、150編の三年生の人称代名詞の総出現回数は394回である。語別の出現回数は表2で示すように、一人称代名詞の「私」が、二年生では総出現回数の80%を占め、三年生では75%を占めた。

甲斐澤(1992)のテレビ番組の調査結果では、10時間分で使われた計442件の人称代名詞には、一人称代名詞がただ23件しか使われてないと報告している。また、小林(1999)では、対象となった職場資料における自称代名詞使用率として10863発話中300例しかないという結果を得た。日本語では一人称代名詞を使わない傾向にあるといえよう。一方、学習者の作文編数と一人称代名詞の出現回数の割合を見ると、学習者が使用過多傾向にあると考えられる。さらに、作文中に一人称代名詞の「俺」を使った学習者もいた。たった一件であるが、書き言葉と話し言葉の違いがあるという日本語の特徴を人称代名詞の使いにも反映している。学習者に人称代名詞の使用を教える際にこれも注意すべきであろう。

日本語学習者の人称代名詞の使用回数は、すでに表2で明らかにされた。しかし、その使用された人称代名詞を、日本語母語話者⁽⁷⁾に判断してもらったところ、実際には省略できるものが多く、総数の半分以上を占めたものもある。先行研究により本稿では、文中に人称代名詞を使用しなくても誰のことを指しているかを推測可能な時と、人称代名詞を使用しても何らかの効果が生まれない時、この二つの場合には人称代名詞が省略可能だと考えられる。表3はその人称代名詞の省略可能と省略不可能な数および割合を示したものである。なお、割合とは、人称代名詞の総出現回数のうち、省略可能な回数と省略不可能な回数をどのくらい占めるかというのである。

表3. 作文に見られる一人称代名詞の省略について

	総出現数	省略可能な数 / 割合	省略不可能な数 / 割合
二年生	547	302 / 55.2%	245 / 44.8%
三年生	394	173 / 43.9%	221 / 56.1%

4.1.2 教科書に見られる人称代名詞

日本語学習者の作文中に人称代名詞の使用傾向と対照をするために、教科書も会話文を除外してテキスト文中(日記、投書など)に現れた人称代名詞を分析する。

初級レベル教科書4冊、中級レベル教科書4冊、計8冊の教科書の中に現れた人称代名詞の数は表4の通りである。

表4で示したように、一人称代名詞「私」の出現回数は他の語より多いことが分った。

しかし、語ごとの使用について、教科書に使用された一人称代名詞は「私」しかないが、日本語学習者の作文中には「私・俺・僕」の三種類ある。人称代名詞の使用種類が多ければ多いほどいいわけではない。教科書には一種類の人称代名詞だけ

が表われているが、学習者がなぜほかの人称代名詞を使ったかが一つの問題点になる。

表4. 教科書に見られる人称代名詞の語別出現回数

教科書		私	私達
初級	作文とスピーチ	24	
	総合日本語		
	日本語作文	66	6
	台湾で学ぶ初級	43	
中級	現代日本語中級		
	中級日本語	13	6
	日本語作文	25	2
	台湾で学ぶ中級	24	1

*空白欄の数値0である。

4.2 省略可能な人称代名詞について

表5は省略可能な一人称代名詞の出現回数を語別に求めたものである。また、表6はその省略可能な人称代名詞が、総出現回数に占める割合(%)を示したものである。

全体的な省略可能な出現回数について、三年生の出現回数が二年生のより、129回も少なく、割合も11.3%減っていることが分かった。さらに、省略可能な語ごとを見ると、学習者の学習歴を問わず、二年生・三年生の作文中に見られた単数形⁽⁸⁾の「私」が省略可能な割合が高いことが分かった。

4.2.1 省略可能な一人称代名詞の文法機能

表7は、省略可能な一人称代名詞語別ごとおよび文法機能(主語と主語以外の文法機能)ごとの出現回数と割合を示したものである。

表7. 省略可能な人称代名詞における文法機能の出現回数(回)および割合(%)

機能	単数形						複数形							
	私		僕		俺		私たち		私達		僕ら		僕達	
	主語	主語以外	主語	主語以外	主語	主語以外	主語	主語以外	主語	主語以外	主語	主語以外	主語	主語以外
二年生(回)	240	3	10	0	0	0	33	2	12	1	1	0	0	0
三年生(回)	131	2	12	0	1	0	14	1	10	1	0	0	1	0
二年生(%)	43.9	0.5	1.8	0	0	0	6.0	0.4	2.2	0.2	0.2	0	0	0
三年生(%)	33.3	0.5	3.0	0	0.25	0	3.5	0.3	2.5	0.3	0	0	0.25	0

さらに、学習者がどんな文機能で人称代名詞を使用したかを見るために、表7に基づき、主語と主語以外がそれぞれにどのくらい省略されているかを別に計算した結果が表8である。

表6では、「私」の省略可能な回数が多いが分かった。さらに、表8では主語の数値が主語以外の数値と比べると、二年生と三年生両方とも高い。つまり、文法機能においては、学習者が人称代名詞の省略な部分がほとんど主語のところである。省略可能な主語多く用いられたのは母語の干渉が

表5. 作文の省略可能な語別の出現回数(回)

	私	僕	俺	私たち	私達	僕ら	僕達	合計
二年生	243	10	0	35	13	1	0	302
三年生	133	12	1	15	11	0	1	173

表6. 作文の省略可能な語別の割合(%)

	私	僕	俺	私たち	私達	僕ら	僕達	合計
二年生	44.4	1.8	0	6.4	2.4	0.2	0	55.2
三年生	33.8	3	0.25	3.8	2.8	0	0.25	43.9

表8. 主語と主語以外における省略可能な回数および割合

	単数形		複数形	
	主語	主語以外	主語	主語以外
二年生	250 (45.7%)	3 (0.5%)	46 (8.4%)	3 (0.6%)
三年生	144 (36.55%)	2 (0.5%)	25 (6.25%)	2 (0.6%)

*括弧外の数値は出現回数であり、括弧内の数値は割合である。

原因であると考えられる。中国語の主語省略文は日本語と比較して少ない。学習者が自分の母語(中国語)の習慣をそのまま目標言語に持ち込んだ結果、人称代名詞の使用過剰になったのである。

4.3 省略不可能な人称代名詞について

4.3.1 作文に見られる省略不可能な人称代名詞について

二年生で、一人称代名詞の「私(俺・僕)」, 「私たち(僕たち)」の総出現回数は462回と83回であるが、省略不可能な数はそれぞれ210回と35回で、総出現数の半分も達していない。つまり初級レベルの一人称代名詞は半分以上が省略できるといえよう。それに対して、三年生の一人称代名詞単数形は、総出現数315回のうち、省略不可能な数が168回で、二年生と同様に、半分以上が省略可能であるが、一人称代名詞の複数形に関しては、総出現数79回のうち53回が省略できず、半数を越えている。要するに、一人称代名詞における複数形は、二年生では省略可能なものが多いが、三年生では省略できないものが多い。

4.3.1.1 省略不可能な一人称代名詞の文機能

省略不可能な人称代名詞の語およびそれらの機

表9. 語別・文機能別における省略不可能な回数

	単数形				複数形			
	話題	強調	明示	対比	話題	強調	明示	対比
二年生	59	40	41	70	14	9	9	3
三年生	53	39	28	48	18	14	17	3

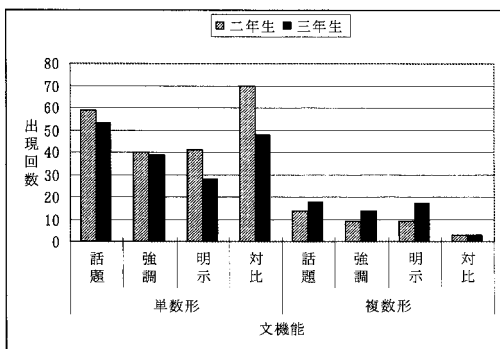


図1: 語別・文機能別における省略不可能な回数

能別の出現回数を整理したものは表9である。また、図1は表9をグラフ化したものである。一人称代名詞の複数系を除けば、各機能上の使用回数は二年生の学習者が三年生の学習者より多い。

図1から、レベルごとに、語別・機能別における人称代名詞の使用がどのような差が出たか分かるであろう。レベルごとに、グラフの変化は全体的に激しい差がないが、三年生が二年生より人称代名詞の使用回数が少ないことがわかった。

4.3.1.2 作文中の具体例

以下では、日本語学習者の作文中にどのように日本語の人称代名詞が使用されるかについて、具体例を見ながら検討していく。各機能上の例を、「二年生」と「三年生」それぞれ一例ずつあげる。例文では、人称代名詞の機能を説明するために、それらの部分に下線を引いてある。

話題導入

省略不可のうち、まず一人称代名詞の話題導入としての使用が比較的多かった。それは一つの話題に入ってから、書き手または書き手の視点を置いている人物の確認をするためである。

次の(13)はあいさつの重要性を強調し、特に人間として生きている私たちにはあいさつの大切さ述べた例である。また(14)は、「お正月」というテーマに沿って書いたものであり、文の冒頭に自分がなぜお正月が好きなのかという主題に入る前にあえて自分が主人公であることを示した例である。

(13) 私たち毎日、いろいろな人に出会います。知り合いにはもちろんあいさつをしますが、知らない人にもあいさつする必要があります。あいさつは日常生活の中の一つ大切な表現で一種の礼儀です。 「二年生」

(14) 中国人にとってお正月はたくさんの伝統行事の中でもっとも大切な行事です。私は子供のときからこの行事が一番好きです。その原因はたくさんあります。その中で最も重要な原因はこの日は一家団らんの日です。全部の親戚をそろって、大晦日に一緒に夕食を食べます。 「三年生」

強調

「強調」機能における一人称代名詞の使用割合は、「二年生」「三年生」で大差ない。

(15)(16)の例では、「私」を主語としている文のおわり、それぞれの感情を表す表現の形容詞「好き」と、動詞「思う」が使用されている。元々この類型の文は人称制限があるため、わざわざ人称代名詞(主語)を使用する必要がない。しかし、わざわざ一人称代名詞を取り上げると強調の意味になる。特に(15)では、お正月を過すときの楽しさ、幸せな気分など、学生でないといわうことができない意味を強調したいため、あえて一人称代名詞の「私」を使用したと推察される。

- (15) 今年の冬休みに一番楽しいのはお年玉をもらうことだと思いました。でも、やっぱり無駄にできてしまって、段々少なくなってしまいます。学生に冬休みがあるのは非常に幸せなことだと思います。私はずっとそう思います。冬休みがあって、よかったです。
「二年生」
- (16) 小さい頃、お正月の台北はいつもよりずっと静かです。外は静ですが、家の中では家族全員そろって話し合ったり、この一年間の出来事をみんなに披露します。私はこういうにぎやかで暖かいふんいき大好きです。
「三年生」

明示

明示の機能として使用された人称代名詞は特に何かと比較したりするのではなく、一つのものを取り立てようとするときに使用されるものであり、省略されると文の意味が分からなくなる。

次の(17)と(18)の人称代名詞は、受け手をはっきりさせるために使われたものである。また、人称代名詞の前に長い修飾詞が付けられたり、後ろに助詞の「の」を付けられたりする例も少ない。

- (17) 母はこの間、日本へ出張しました。商売の相手の代表は二十三歳の男子、山川さんでした。母は山川さんと食事をしたとき私に電話をかけました。そして、私を山川さん

に紹介しました。

「二年生」

- (18) 権利と言うのは、自分を守るものです。例えば、貧乏でもお金持ちでも、誰でも学校へ行けます。これは法律が私たちに教育を受ける権利を与えたからです。
「三年生」

対比

「対比」機能で使用される人称代名詞は、文中に二つのものを比較する場合に使われるものであり、比較対象をはっきりさせたい時に使用されるものである。

(19)はクレジットカードを使っている学生と対照し、一人称代名詞の「私」が使われた。(20)はエレベーターに閉じこまれた皆が感じた緊張の気分を自分も感じたから一人称代名詞の「私」を使った例というである。人称代名詞の後ろに両方も助詞の「も」がついてるのは特徴である。

- (19) 最近、クレジットカードを使う学生が増えています。私も持っています。クレジットカードは必要だと思いますから。
「二年生」
- (20) お正月の期間に、買い物をするために、デパートへ行った。エレベーターに乗った時、私にとって一番怖くて驚いたことが起きた。突然、エレベーターが故障してから、電源が切れた。弟と母と知らない人は皆、暗い中で大声で「助けてください」という話を呼んだ。でもぜんぜん返事はなかったのでもっと緊張になった。私もこんな緊張な気分を感じた。
「三年生」

4.3.1.3 省略不可能な一人称代名詞の文法機能

表10は省略不可能な一人称代名詞の出現回数と、その総出現回数に占める割合(%)を示したものである。

図2は、表10の数値を折れ線グラフにしたものである。図2では、二年生が三年生の折れ線の変化に似ていることと、各文機能における主語の省略不可能な割合が主語以外の割合より高いことが分かった。表11は主語と主語以外の数値を表したものである。

二年生においても三年生においても省略不可能な主語が多いが、二年生が三年生と比べ、省略不

表10. 省略不可能な人称代名詞における文法機能の出現回数(回)および割合(%)

機能	単数形								複数形							
	話題		強調		明示		対比		話題		強調		明示		対比	
	主語	主語以外	主語	主語以外	主語	主語以外	主語	主語以外	主語	主語以外	主語	主語以外	主語	主語以外	主語	主語以外
二年生(回)	45	14	27	13	4	37	48	22	13	1	7	2	2	7	2	1
三年生(回)	40	13	23	16	6	22	29	19	17	1	9	5	8	10	2	1
二年生(%)	8	2.6	4.9	2.4	0.7	6.8	8.8	4.0	2.4	0.2	1.3	0.4	0.4	1.3	0.4	0.2
三年生(%)	10.2	3.3	5.8	4.1	1.5	5.6	7.4	4.8	4.3	0.25	2.3	1.3	2.0	2.5	0.5	0.25

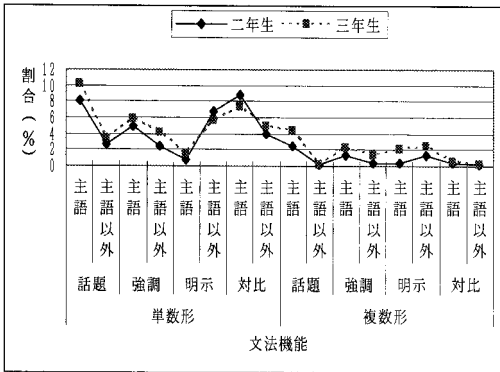


図2: 省略不可能な人称代名詞における文法機能の割合

表11. 主語と主語以外における省略不可能な出現回数および割合

	単数形		複数形	
	主語	主語以外	主語	主語以外
二年生	124 (22.4%)	86 (15.8%)	24 (4.5%)	11 (2.1%)
三年生	98 (24.9%)	70 (17.8%)	36 (9.1%)	17 (4.3%)

表12. 教科書における人称代名詞の機能別出現回数

教科書	私				私達(僕たち)			
	話題	強調	明示	対比	話題	強調	明示	対比
初級	作文とスピーチ	14	5	4	1			
	総合日本語							
	日本語作文	30	14	15	7	1	5	
	台湾で学ぶ初級	20	7	9	7			
中級	現代日本語中級							
	中級日本語	5	2	4	2	3	3	
	日本語作文	10	9	3	3		2	
	台湾で学ぶ中級	8	6	6	4	1		

可能な主語の出現率は増えている。また、それは主語以外においても同じであった。つまり、習得は進んでいるといえる。

4.3.2 教科書に見られる省略不可能な人称代名詞について

総出現回数(教科書の総出現回数が表4を参照)の8割を占めた一人称代名詞「私」の機能上の使用について、「話題」機能が一番多かった。それに続いて、「強調」機能と「明示」機能の数はほぼ同じである。「対比」機能は全体的の12%しか占めてない。

4.3.2.1 省略不可能な一人称代名詞の文機能

人称代名詞の機能上の使用はどのような違いがあるかについて、表12と図3を示す。総出現回数は中級レベルの教科書より、初級レベルの教科書の方が多。機能上の使用に関しては、一人称代名詞「私」の「話題導入」機能は、初級レベルが中級レベルの三倍ほどもある。「話題導入」機能を除けば、「強調」機能、「明示」機能、そして

「対比」機能は、初級レベルが中級レベルの二倍である。図3から、中級レベルの教科書には、一人称代名詞「私」の使用は、右側へいくほど出現回数も下がっていくことが分る。それに対し、初級レベル教科書には不規則な数値になっている。

表13. レベル別・機能別における人称代名詞の出現回数

	単数形		複数形	
	主語	主語以外	主語	主語以外
二年生	124 (22.4%)	86 (15.8%)	24 (4.5%)	11 (2.1%)
三年生	98 (24.9%)	70 (17.8%)	36 (9.1%)	17 (4.3%)

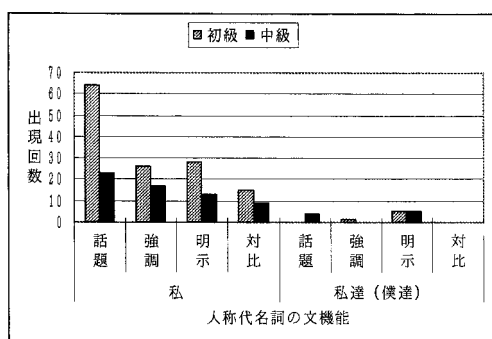


図3: 教科書における人称代名詞のレベル別の出現回数

4.3.2.2 教科書中の具体例

教科書では、人称代名詞がどのように使用されているか、機能別による人称代名詞の例をあげてみる。なお、さきほどと同様に人称代名詞の機能を説明するのにそれらの下に下線が引いてある。

話題導入

機能別出現回数について、一人称代名詞の「私」の「話題導入」の出現回数は圧倒的に多い。

(21) 私は八月の末に、日本へ行く予定です。うちの大学の姉妹校へ行って、日本語を習います。そして、茶道や華道などの日本文化を勉強します。六ヶ月ほど、にほんにしようと考えています。

(『台湾で学ぶ初級日本語』p.139)

(22) 私は在米の日系人です。十数年前に初めて父母と懐かしい故郷日本を訪れ、それ以後何度か訪日の機会がありました。訪日の都度、都市の川や空気が徐々に清浄化されてきていると感じます。さすが両親の祖国だけある誇りに思います。しかし、残念なのは騒音の公害で、だんだんひどくなるばかりです。(『中級日本語』p.71)

(21) は初級のレベル教科書の例文で、(22) は中級のレベル教科書の例文である。初級の方は「短期留学」というテーマについて書かれたテキスト文の冒頭の一部であり、中級のそれは「拡声器を禁止しよう」について書かれた投書である。教科書に現れた人称代名詞における「話題」という機能のパターンは、例に示したようなものばかりである。「話題」という機能がもっとも多い教科書は『日本語作文』であり、(23) がその中の一つの例文である。

(23) 高校の時、私は毎朝7時20分に家を出ることにしていました。けれども、遅刻しそうになって走ったこともあり。帰りは、友だちとたまに寄り道をして、ケーキ屋さんや本屋さんへ行きました。校則では禁止されていたので、なんとなくスリルがあって、ドキドキしたことをいまでもなつかしく思い出します。

私は3年間ずっと合唱部でした。練習はつらくもあり、また楽しくも有りました。1年に1度の発表会の前は、練習で帰りがおそくなるのがよくありました。

(『日本語作文』p.53)

『日本語作文』での話題という機能で用いられたものが理由は、(23) のように、段落が変わることによって話題も変わり、新しい話題に入るたびに人称代名詞が使用されるためであると考えられる。この点について、教科書の人称代名詞における話題という機能については日本語学習者が使用したものとほぼ同じである。

強調

人称代名詞における強調という機能の出現回数

は話題導入の出現回数の半分もない。

(24) カナダに留学している二十歳の女子学生は、日本の男性は一般的によく働くと言いました。それは、日本は生活費が高いので、働かなければ生活できないからだそうです。【中略】けれど、生活のために働くのは当たり前だと私は思います。

(『作文とスピーチ』 p.145)

(25) 私にとっても、酒は今まで良い友達であり悪い友達であった。いや、少々、悪い友達の面の方が多かったかもしれない。なぜなら酒は私から多くのものを奪っていったからだ。金、時間、健康、チャンス……。その上酒に酔ってあれこれ間違いをしでかしたことを考えると、今でも恥ずかしく思う。けれども、振り返ってみれば、私が困っていた時、寂しい時、酒は最上の慰めであった。私はいまもそのありがたさが忘れられない。(『日本語作文』 p.43)

(24) は、「日本人は働きすぎか」について自分の意見を言おうとしている作文からとった例である。筆者は、なぜ日本の男性がよく働く理由を聞いて、自分も同感し、さらに、人間は働くことも当たり前だと思い、生活費が高い日本に住む日本人には働くことは一層必要と強調しようとして、「私」を使ったわけである。(25) では、筆者は酒に関しては、どちらかという悪い面のほうが強いと主張しながら、自分を酒に助けられたことがあったからこそ、自分にはお酒がいいという点を強調した。

明示

明示の機能は強調と同様に、出現回数は話題導入の出現回数の半分もない。

(26) は、他の人が知っているかどうか分からないが、自分の知っているところでは、車内放送があるという例である。はっきりしている対照できる対象がないため、「対比」機能ではなく、「明示」機能となる。(27) は、バスの中にたくさんの乗客がいるので、「自分」の側ということを明示するために、一人称代名詞「私」を使った例である。

(26) 去年の夏、日本へ行ってきました。午前中は東京のある大学で日本語を勉強して、午後はいつも友達と東京見物をしました。見物に行くとき、殆どバスや電車を利用しましたが、その時、車内放送のことでいろいろ考えさせられました。私の知っているところでは、日本ではバスも電車も車内放送があります。(『台湾で学ぶ中級』 p.21)

(27) 以前、ヨーロッパを旅行したとき、こんな経験した。観光バスに乗ってあちらこちら見て回ったときのことである。私は三歳の孫を抱いていた。バスに乗り合わせた四十人ばかりの乗客はみな外国人だった。子供をかわいがる人たちだとみえて、私のそばを通る時に、孫の顔を見て、にっこり笑ったり手を振ったり、孫の手を握ったり、あるいは自国の言葉で声をかけたりしてくれる。(『中級日本語』 p.26-27)

対比

(28) クラスメートの沈さんは、先月オートバイを買ったばかりです。今、毎日それで大学に通っています。とても便利そうです。私も来学期から、オートバイで通学するつもりです。(『台湾で学ぶ初級』 p.90)

(29) それに習字をやっていると、国のこと、とくに高校生のころを思い出して、とてもなつかしい気持ちになります。習字は孤独な趣味です。友だちは「もっと外にでて遊んだ方がいいでしょう」と言いますが、私は習字をやっていると本当にじかんを忘れてしまうのです。(『日本語作文』 p.43)

(28) では、クラスメートの沈さんと対照で、一人称代名詞の「私」が使用されている。それに「私」の後ろにすぐ助詞「も」があり、「対比」機能は一層強くなっている。(29) では「私」の後ろに助詞「も」がないが、「～は……が、～は……」の文型から判断すれば、「私」を使って、友だちと比較している点分かる。

4.3.2.3 省略不可能な一人称代名詞の文法機能

表14は教科書に見られた省略不可能な文法機能

表14. 省略不可能な人称代名詞における文法機能の割合 (%)

機能	単数形								複数形							
	話題		強調		明示		対比		話題		強調		明示		対比	
	主語	主語以外	主語	主語以外	主語	主語以外	主語	主語以外	主語	主語以外	主語	主語以外	主語	主語以外	主語	主語以外
初級	41	5	15.1	3.6	3.6	16.6	10.1	0.7			0.7			3.6		
中級	28.2	4.2	18.3	5.6	2.8	15.6	11.3	1.4	5.6					7		

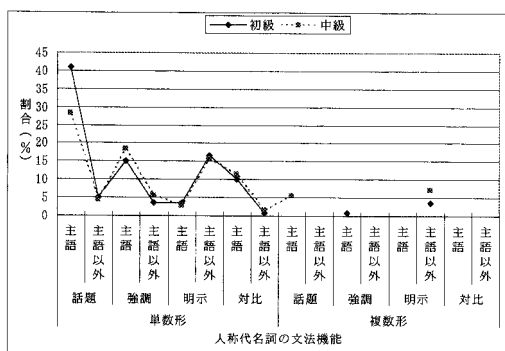


図4：省略不可能な人称代名詞における文法機能の割合

の割合を示したものである。図4は表14のデータを折線グラフに換えたものである。図4から、中級が初級と折線の変化は大きな差がないことが分かった。全体を見ると、「明示」機能を除いて主語の割合が主語以外より高い。

また、表15は文法機能における主語と主語以外に分けた数値を表したものである。文法機能に関しては、人称代名詞が主語の役割を果たすものが多い。特に話題かつ主語の割合が高い。それは、教科書に話題導入をする時、「私は～です」という文型がよく使用されたからである。「明示」

表15. 主語と主語以外における省略不可能な回数および割合

	単数形		複数形	
	主語	主語以外	主語	主語以外
初級	97 (69.8%)	36 (25.9%)	1 (0.7%)	5 (3.6%)
中級	43 (60.6%)	19 (26.8%)	4 (5.6%)	5 (7%)

機能を持っているもののうち主語以外に使用された割合が高い原因は、「私の～は～です」という文型が多く使用されたからである。

5. 結果のまとめと総合的考察

4の分析を踏まえて、台湾の日本語学習者が書いた作文に見られる人称代名詞の使用と、教科書中の人称代名詞を分析した結果をまとめて整理したい。なお、グラフ内の「二年生」、「三年生」は「二年生の日本語学習者」と「三年生の日本語学習者」を、「初級」、「中級」は「初級レベルの教科書」と「中級レベルの教科書」を意味するものである。

5.1 人称代名詞の使用頻度について

まず、使用された省略不可能な人称代名詞およびその使用回数に違いについて見ていく。

表16は、学習者の書いた作文中に使用された人称代名詞と、教科書に見られた人称代名詞の単複形別の使用回数を示したものである。作文の人称代名詞の総出現数は、教科書の5倍もあり、学習者の人称代名詞の使用過多だという結果が言えよう。総出現回数の内訳では、一人称代名詞「私」の数が、教科書と作文の両方ともに多いという点が見られた。

表16. 作文中と教科書に見られる人称代名詞の語別および回数

	単数形	複数形	総出現数
二年生	463	84	547
初級	133	6	139
三年生	314	80	394
中級	62	9	72

個々の語の使用について、表17で示したように教科書に見られた一人称代名詞は「私」だけであるが、作文中には「私」以外、「俺・僕」の使用も見られた。

表17. 人称代名詞の総出現回数における語別の内訳

	私	俺・僕	私たち (僕たち)	総出現 回数
二年生	444	19	84	547
初級	133	0	6	139
三年生	295	19	80	394
中級	62	0	9	71

5.2 文機能別における人称代名詞の使用について

作文中に見られた人称代名詞が使用過多であることは4.1.1で明らかにされた。一方、機能別における省略不可能な内訳について、教科書と作文を比較した結果が表18である。また、その割合を示したのが表19である。

レベルを問わず、教科書に見られた一人称代名詞における「話題」機能の使用率が、「強調」機能より高いのに対し、作文では「話題」機能より、「強調」機能の方が高い。「明示」機能の使用は教科書と作文のどちらも多い傾向があるが、「対比」機能の使用は、教科書では少ないといえよう。

図5と図6は(レベル別)表19の数値に基づい

表18. 初級・中級レベルにおける機能別の出現回数の内訳

	単数形				複数形			
	話題	強調	明示	対比	話題	強調	明示	対比
二年生	59	40	41	70	14	9	9	3
初級	64	26	28	15	0	1	5	
三年生	53	39	28	48	18	14	17	3
中級	23	17	13	9	4	0	5	0

表19. 初級・中級レベルにおける人称代名詞の機能別の使用頻度(%)

	単数形				複数形			
	話題	強調	明示	対比	話題	強調	明示	対比
二年生	24.1	16.3	16.7	28.6	5.7	3.7	3.7	1.2
初級	46.1	18.7	20.1	10.8	0	0.7	3.6	0
三年生	24	17.6	12.7	21.7	8.15	6.3	8.15	1.4
中級	32.4	23.9	18.3	12.7	5.6	0	7.1	0

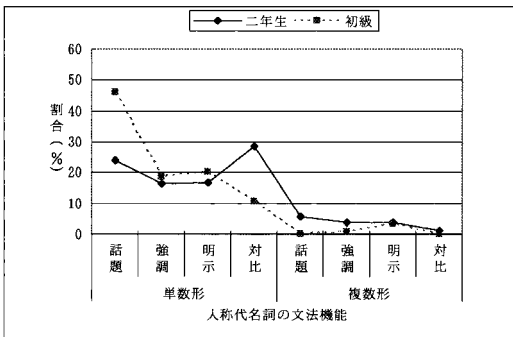


図5: 初級レベルにおける人称代名詞の機能別・語別の使用割合

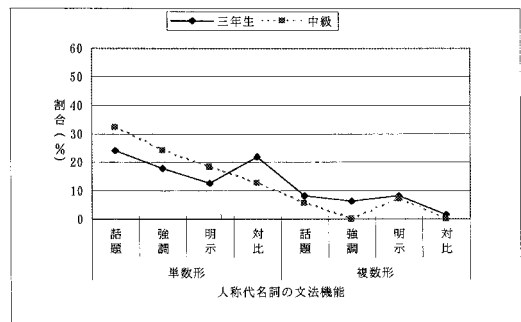


図6: 中級レベルにおける人称代名詞の機能別・語別の使用割合

表20．レベル別・文法機能別における省略不可能な割合（％）

機能	単数形								複数形							
	話題		強調		明示		対比		話題		強調		明示		対比	
	主語	主語以外	主語	主語以外	主語	主語以外	主語	主語以外	主語	主語以外	主語	主語以外	主語	主語以外	主語	主語以外
二年生	18.4	5.7	11	5.3	1.6	15.1	19.6	9	5.3	0.4	2.9	0.8	0.8	2.9	0.8	0.4
初級	41	5	15.1	3.6	3.6	16.6	10.1	0.7			0.7			3.6		
差	22.6	0.7	4.1	0.7	2	1.5	9.5	17.8	5.3	0.4	2.2	0.8	0.8	0.7	0.8	0.4
三年生	18.1	5.9	10.4	7.2	2.7	9.9	13.1	8.6	7.7	0.5	4.1	2.3	3.6	4.5	0.9	0.5
中級	28.2	4.2	18.3	5.6	2.8	15.6	11.3	1.4	5.6				7			
差	10.1	1.7	7.9	1.6	0.1	5.7	1.8	7.2	2.1	0.5	4.1	2.3	3.6	2.5	0.9	0.5

て作成したものである。学習者の人称代名詞の使用パターンと教科書の人称代名詞の使用パターンと、どんな違いがあるのであろうか。

図5では、二年生の折線の変化は、初級レベル教科書と比較すれば、かなり大きな違いがある。二年生の作文中に見られる一人称代名詞の機能別・語別の使用に急激な変化が見られるが、割合の数値はすべて30%以下である。一方、教科書の一人称代名詞の複数形「話題」機能を除けば、他の各機能の割合はほぼ20%以下である。「話題」機能の割合は一番高く、右側の項目（強調、対比の順に）へ行けば徐々に下がっていく傾向が見える。二年生の作文中に見られる一人称代名詞は、単数形の「話題」機能より、「対比」機能の割合が高かった。

図6では、三年生の折線のパターンが、中級レベルの教科書と比べると多少違う点があるが、初級レベルの教科書と二年生の作文の結果（図5参照）ほど大きくはないことが分かる。つまり、二年生より三年生の学習者がより教科書に近い人称代名詞を使用したといえよう。一人称代名詞について、教科書の単数形「私」は、「話題」機能の右側の機能（強調・明示の順に）へ行けばいくほど、その割合が下がっていく。複数形の「私たち」の明示機能になると、割合がまた増えた。一人称代名詞のパターンについて、初級レベルと中級レベルの教科書は同じ傾向があるといえる。

三年生の作文中に見られる単数形は、「話題」機能から「明示」機能の折線が、教科書と同じで下がっていったが、「対比」機能の項目では増え

ている。

5.3 文法機能別における人称代名詞の使用について

表20は教科書と作文に見られた人称代名詞の省略不可能な文法機能を比較した結果を表したものである。また、図7と図8は表20の数値をグラフにしたものである。

図7では、二年生の折線の変化は、初級レベル教科書と比較すれば、「単数形・話題・主語」の差が一番大きい。「単数形・話題・主語」以外にも作文が教科書と違うところがあるが、「単数形・話題・主語」ほど大きくはない。図8の場合では、三年生の「単数形・話題・主語」と「単数形・話題・強調」が教科書のそれと比べると少し差があるしかし、二年生の人称代名詞の使用傾向

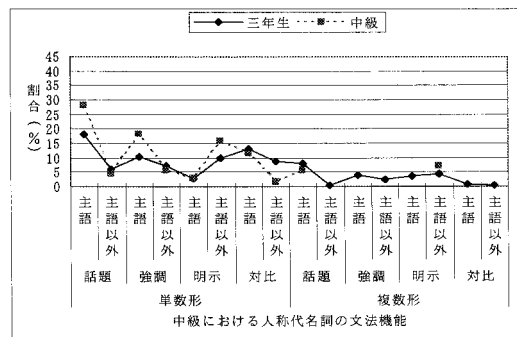


図7：初級レベルにおける人称代名詞の文法機能別の割合

より、三年生の方が教科書に若干似ているといえよう⁽⁹⁾。

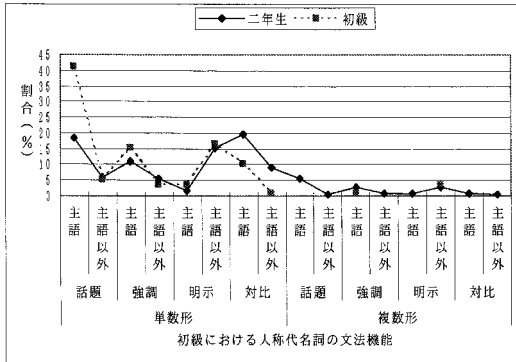


図8：中級レベルにおける人称代名詞の文法機能別の割合

5.4 結果の考察

以上、日本語学習者の使用する人称代名詞と教科書で使用される人称代名詞とを、人称代名詞の機能的な分類に基づき、語別・機能別における出現回数や割合、そしてその使用パターンを量的に分析した。その結果、以下のことが判明した。

- 1) 日本語学習者のレベルにより、作文中に用いる一人称代名詞の、語別・機能別における使用量、およびその使用パターンが異なった。量的には二年生と三年生、両方とも使用量が多く、しかも省略可能な人称代名詞も多かった。一方、使用パターンに関しては、日本語の上達につれ、人称代名詞の使用も教科書に似てくる。つまり、二年生学習者より、三年生学習者の日本語の人称代名詞の使用は、教科書の中に現れるそれらの使用と同じ傾向があるといえよう。
- 2) 教科書に現れる人称代名詞の使用は、レベルを問わず、使用量が少なく、使用パターンも同じであることが分かった。
- 3) 文機能については、一人称代名詞の「話題」機能の使用割合は、レベルに関係なく、学習者の作文と教科書のどちらにおいてももっとも高かった。それは、日本語学習者には「私」の「話題」機能がもっとも習得しやすく、かつ使いやすいのではないかと考えられる。

- 4) 文法機能に関しては、省略可能と省略不可能両方ともに、人称代名詞を「主語」としての使用の割合が高かった。省略可能な主語の使用は母語の干渉であるとおもわれるが、省略不可能な主語の使用は教科書の文型の影響であると考えられる。

6. おわりに

従来、人称代名詞に関する研究は、その使用量だけに注目した研究が多かった。そこで本稿は、人称代名詞の使用量のみならず、その使用パターン、つまり日本語学習者はどのように人称代名詞を使うかも分析を行った。さらに、日本語習得歴が異なる日本語学習者の人称代名詞の使用上の違いおよびそれらを教科書と比べた結果も明らかにした。

人称代名詞の使用は産出する際の視点の位置やテーマなどもかかっているが、二年生の学習者は適切な動詞を選んだり、動詞の形を変えたりする語彙・文法の習得レベルが低いため、普段よく使う比較的少数の動詞に「わたしが」「わたしに」を補って日本語の作文を作っていると考えられる。二年生より三年生の人称代名詞の使用がより自然な日本語に近いことは、教科書からの影響もあれば、他の文法事項(項目)を習得した結果であるとも考えられる。そのため、教科書が学習者にどのぐらいの影響を与えたかを明らかにするにはさらに多くの分析資料を収集し、教科書の他の文型パターンを考慮する必要もあると思う。これは今後の課題としたい。

注

- (1) 水谷信子(1994)は、人称に関する問題で最もめだつものとして「あなた」の乱用を指摘し、また「わたし」に関するディスコース上の誤用が相手に圧迫感を与えるという。(『実例で学ぶ誤用分析の分析』アルク p.31-32)。
- (2) 人称代名詞が一つの文の中でいかなる働きをするか、そして一つのセンテンスでいかなる働きをするか(ここでは主語が主語ではないかを分類する)、という二つの視点でもって分析することを

本稿では文機能的な分析と文法機能的な分析と呼ぶ。

- (3) モダリティとは、「話者の述べる客観的情報に対する話者の発話上・伝達上の心的態度である。」仁田(1991:18)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房。
- (4) 本稿の主語という定義は、柴谷方良が主張した主語プロトタイプ論(1985,1989)により主語の特性を規定する。
- (5) 教科書が学習者の日本語習得に影響を与える可能性があるとされた研究がある。(母育新(1999)日本語教育学会秋季大会予稿集)
- (6) すなわち、一人称代名詞の「ぼく」を二人称代名詞として、「ぼく、いくつ」というような例、(小さい男の子と話す時、その子のことを「ぼく」という場合)。鈴木孝夫(1973)「二人称として僕の虚構的な用法がある」『ことばと文化』岩波新書。
- (7) 省略可能かどうかの判断は日本語母語話者5名(大阪出身女性40代・OL,三重県出身男性30代・学校の事務員,石川県出身男性20代・大学院生,山口県出身女性20代・OL,福岡県出身男性20代・フリーター)によって行われた。
- (8) 本稿では、私・僕・俺などの単数形の一人称代名詞を「単数形」といい、私たち・私達・僕達などの複数形の人称代名詞を「複数形」という。
- (9) 表21の「差」欄を計算した結果、初級と二年生が3.4%の差があるのに対して、中級と三年生の差がゼロであった。

謝辞

本稿の作成は、修士論文の一部を取り上げたものであり、深見先生からは、ゼミナールの指導から論文執筆に至るまで、懇切丁寧な指導を頂いた。深見先生に厚くお礼申し上げます。

参考文献

- 雨宮朋子・林部英雄(1993),「日本語における“談話主題”の省略に関する実験的研究」,『横浜国立大学教育紀要』33,265-280
- 石橋玲子(2002),『第2言語習得における第1言語の関与 - 日本語学習者の作文産出から - 』風間書房
- 甲斐澤とし子(1992),「話しことばにおける『省略』の研究 - 『思う』とその主語の省略について - 」,『学苑』627,122-129
- 郭春貴(1993),「日中両国語における人称代名詞の用法の比較研究」,『広島修大論集』33(2),15-33
- 金谷武洋(2002),『日本語に主語はいらない』講談社
- 神尾昭雄(1990),『情報のなわ張り理論』大修館書店
- 神崎高明(1994),『日英語代名詞の研究』研究者出版
- 金昌男(2002),「現代日本語の授受表現における人称と視点について - 韓国語との対照を通して」,『千葉大学社会文化科学研究』6,226-233
- 金水敏(1988),「代名詞と人称」,『講座日本語教育4』明治書院
- (1995),「敬語と人称表現 - 視点とその関連から」,『国文学』40(14),62-66
- 小林美恵子(1999)「自称・対称代名詞とその省略 映画『女人四十』にみる」,『ことば』,現代日本語研究会,Vol.20,162-171
- 迫田久美子(1999),「学習者言語研究の過去・現在・未来 - 第二言語としての日本語習得研究の変遷と展望について - 」,『奥田邦男先生退官記念論文集 日本語教育学の展開』溪水社,72-86
- 柴谷方良(1990),「助詞の意味と機能 - 『は』と『が』を中心に - 」『文法と意味の間』くろしお出版,281-301
- 蔭秋菊(1999),「人称代名詞の日中対照」,『講座日本語教育』35,65-76
- 鈴木孝夫(1973),『ことばと文化』岩波新書
- 田窪行則(1990),「ダイクシスと談話構造」,『講座日本語と日本語教育12』明治書院
- (1992),「言語行動と視点 - 人称詞を中心に - 」『日本語学』11(8),20-27
- (1997),「日本語の人称表現」『視点と言語行動』くろしお出版
- 田中克彦(1993),『国家語をこえて』ちくま学芸文庫
- 寺内久仁子・白井香織(2001),『初級日本語文型の教え方にほんご1・2・3 - 教師用解決書』アルク
- 寺村秀夫(1982),『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版
- 仁田義雄(1991),『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 野田尚志(1991),『はじめての人の日本語文法』くろしお出版

- (1996), 『「は」と「が」』くろしお出版
- 野田尚志他(2001), 『日本語学習者の文法習得』大修館書店
- 廣瀬幸生(2001), 「授受動詞と人称」, 大修館『月刊言語』30(4), 64-70
- 母育新(1999), 「待遇表現の習得における中国人学習者の問題点と教科書が与える影響」, 『日本語教育学会大会予稿集』, 165-170,
- 益岡隆志・田窪行則(1992), 『改訂基礎日本語文法』くろしお出版
- 水谷信子(1994), 『実例で学ぶ誤用分析の方法』アルク
- (1999), 「日本語の形容詞の人称区別機能について」『心を伝える日本語講座』研究社出版
- 三輪正(2000), 『人称詞と敬語 言語論理的考察』人文書院
- 村上京子(1996), 「『わたし』の使用過多について」, 『日本語研修コース修了生追跡調査報告書』2, 129-136

- 李萍(1994), 「日本語の『ムード省略文』に対応する中国語の特徴」, 『広島大学教育学部紀要』43(2) 299-309

調査資料(日本語教科書)

- 鵜沢梢(1998)『作文とスピーチのレッスン～初級から中級へ～』アルク
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター(1994)『中級日本語』にほんごの凡人社
- 水谷信子(1991)『総合日本語初級から中級へ』アルク
- 水谷信子(1998)『現代日本語中級総合講座』アルク
- 頼錦雀(1997)『台湾で学ぶ初級日本語』非売品
- 頼錦雀(1998)『台湾で学ぶ中級日本語』非売品
- C&P 日本語教育・教材研究会(1988)『日本語作文』専門教育出版
- C&P 日本語教育・教材研究会(1988)『日本語作文』専門教育出版

Abstract

On the Use of the Japanese Personal Pronouns by the Taiwanese Learners of Japanese Focusing on the First Personal Pronouns

Yi-ting Tseng

Doctorate Candidate,

Graduate School for International Development and Cooperation (IDEC),

Hiroshima University, Higashi-Hiroshima 739-8529, Japan

This study proposes a method of “functional analysis” (Text function and Sentence function) to investigate the quality of the usage of the personal pronouns of Japanese by Taiwanese learners. It compares and analyzes the usage of the personal pronouns in the Japanese textbooks and the learners’ actual use in their compositions. Many quantitative analyses have been done on the usage of the personal pronouns by learners of Japanese. Qualitative analyses on this area, however, are rare.

The results show that the usage of the personal pronouns change with the learners’ proficiency in Japanese both quantitatively and qualitatively. The personal pronouns occurring in the textbook differ from that of the learners actually use in their writing.

As for the text function, the rate of the topic function is higher than other functions. As for the sentence function, the rate of which the personal pronouns are used as a subject is very high whether it can be omitted or not. This is caused by the interference learners’ first language. It can be seen clearly that their use of the personal pronouns is influenced by the sentence patterns of the textbooks.